

『逃げるは恥だが役に立つ』論
—ハイ・モダニティにおける第三波フェミニズムの視点から—

中山采泉

〈目次〉

第 1 章	はじめに.....	3
	1.1 研究背景.....	3
	1.2 研究の目的.....	3
	1.3 研究方法.....	4
第 2 章	逃げ恥とは.....	4
	2.1 『逃げるは恥だが役に立つ』とは.....	4
	2.2 『逃げ恥』のあらすじ.....	5
	2.3 主要な登場人物.....	6
第 3 章	フェミニズムの系譜と第三波フェミニズム.....	6
	3.1 フェミニズムとは.....	6
	3.2 第一波フェミニズムの理論.....	6
	3.3 第二波フェミニズムの理論.....	7
	3.4 ウーマンリブ運動後の第二波フェミニズムの理論.....	7
	3.5 現代のフェミニズム.....	8
	3.5.1 ポストフェミニズム.....	9
	3.5.2 第三波フェミニズム.....	11
	3.5.3 現代フェミニズムまとめ.....	12
第 4 章	『逃げ恥』とフェミニズム.....	12
	4.1 『逃げ恥』とポスト&第三波フェミニズム.....	12
	4.2 菊池夏野の『逃げ恥』批評.....	13
	4.3 愛情の搾取という問題.....	14
第 5 章	コンフルエント・ラブとは.....	16
	5.1 ギデنزのコンフルエント・ラブ.....	16
	5.2 コンフルエント・ラブと民主制.....	16
第 6 章	ハイ・モダニティ.....	18
	6.1 ハイ・モダニティとは.....	18
	6.2 ハイ・モダニティと第三波フェミニズム.....	19

第7章	『逃げ恥』とハイ・モダニティ	19
	7.1 『逃げ恥』に観られるコンフルエント・ラブ	20
第8章	結論	21
	8.1 『逃げ恥』はポストフェミニズム的であるか	22
	8.2 『逃げ恥』はハイ・モダニティにおける第三波フェミニズム的作品 である	22
参考文献	23

[キーワード] ポストフェミニズム、第三波フェミニズム、コンフルエント・ラブ、ハイ・モダニティ

第1章 はじめに

1.1 研究背景

2016年にTBSテレビが制作した火曜ドラマ『逃げるは恥だが役に立つ』（以下『逃げ恥』）がヒットした。これは海野つなみ原作の同名漫画作品をドラマ化したものであった。このドラマは、原作に沿って、賃金の発生する契約結婚という日本社会の現状からすると非日常的な基本設定を採用しているにも拘らず、幅広い層で人気を博した（後述）。テレビドラマが不振だといわれている状況のなかでも、高い視聴率を記録し、SNS上では、ドラマの物語に関する考察や感想だけでなく、結婚や恋愛、仕事、主婦、子育てなどの問題について、視聴者の実生活に基づいた意見や共感の表明、交換が展開された。そのことから、単なるエンターテインメントとは異なる重みをもったドラマであったということができ、ドラマ公式キャッチコピーの通り「社会派ラブコメディ」として受容された側面があるといえよう。連続ドラマ終了後も、続編を期待する声が多く、2019年には連載が再開され、その続編の内容に新型コロナウイルスによる社会混乱を反映させた形でスペシャルドラマが制作された。以上のような作品の人気を受け、『逃げ恥』を題材とした論考も書籍やウェブサイト、雑誌等を通して多く刊行された。経済学や家族社会学などの視点から『逃げ恥』で示された結婚形態を考察するものもあったが、多くはフェミニズムの視点から論じられた。本研究で主に取り上げる菊池夏野の『『逃げ恥』に観るポストフェミニズム』もその一つである。

1.2 研究の目的

本研究では、『逃げ恥』がなぜこの時代に描かれ、人々の心を掴んだのか、また、この人気を示す日本社会の現状と課題を、日本におけるフェミニズムやギデンズのハイ・モダニティ論を用いて考察する。

『逃げ恥』には、社会での生きづらさに対する問題提起が多く含まれている。本作品の主題の一つは、専業主婦労働の金銭的価値である。高学歴女性の就職問題や産休の順番待ち、男性の育休取得に関する問題なども、ストーリーに織り込まれている。社会に対する疑問や不満をコミカルに提示し、伝統や慣習という言葉のもとで回避されがちなそれらの問題について、本当に平等で合理的な選択とは何かを問いかける。さらに、制度が介入できる公的な場面ではなく、日常生活を主な舞台として描くことによって、私生活で言語化や認識共有がなされにくい苦悩にも目を向けさせることに成功している。本研究では、主人公が直面する問題を紹介することで日本社会におけるフェミニズムの課題を示し、本作品の popularity が日本のフェミニズムの発展にとってどのような意味を持ちうるのか、またその発展のために私たちにどのような動きが必要とされるのかを考えていく。

また、ギデンズのハイ・モダニティ論及びその前提となるコンフルエント・ラブの概念を引用することによって、『逃げ恥』で主人公二人が実践した関係性を説明することを試みる。さらにフェミニズムとハイ・モダニティの関係性についても言及する。政治的民主制を達成する前段階として、個人的な関係において民主主義を達成するというハイ・モダニティ的思想は、本作品が持つフェミニズムの文脈において果たすことが期待されている役割と対応す

るのではないかと仮説を立てた。

このように本作品は、現代日本社会におけるフェミニズム理論の変遷と、いまだ残されている課題や現在を把握するための窓として、あるいは後期近代社会における恋愛、婚姻、家族、職場でのコミュニケーションの様相を捉えるためのシミュレーション素材として価値を持つと考えられる。本作品の考察を通じて、日本社会における女性問題及びジェンダー問題の現在を捉え直してみたい。

1.3 研究方法

本研究では、2019年に現代思想に寄稿された菊池夏野の『逃げ恥』に観るポストフェミニズム」を主たる参照軸とし、同論への批判を試みる。菊池の主張は、「逃げ恥はポストフェミニズム的な物語であり、ネオリベラリズム的な解決をはかるコンフルエント・ラブの理想によって、ジェンダー不平等を覆い隠しているに過ぎない」というものである。本研究は、ポストフェミニズムではなく第三波フェミニズムの観点から『逃げ恥』の内容や影響を説明することによって、作品のキャラクターに特徴的である「コンフルエント・ラブ」に基づく人々の関係性が視聴者や社会に与える影響を肯定的に捉え直すことを目指す。「コンフルエント・ラブ」がハイ・モダニティ社会を導くというギデنزの考えを発展させ、そのように作られていく社会こそ、第三波フェミニズムが求めている社会であり、フェミニズムが問題としていることの根本的な解決につながるということを説明していく。

本研究では、ストーリー理解の参考として漫画版の画像を挿入しているが、言及するセリフは、ドラマ版のシナリオブックからの引用に統一している。また、『逃げ恥』がドラマ化を通じて大きな人気を獲得した事実をふまえて、ここで紹介するストーリー展開についてもドラマ版に準拠している。

第2章 逃げ恥とは

2.1 『逃げるは恥だが役に立つ』とは

本研究で主に扱っている海野つなみの『逃げるは恥だが役に立つ』とは、講談社の月刊コミック「Kiss」に2012年から連載され、全11巻の単行本を持つ漫画である。2016年（10月－12月）にはTBSテレビによって火曜ドラマ化され最高視聴率20.8%を記録した。主題歌に起用された星野源の『恋』を出演者が躍る「恋ダンス」が「踊ってみた」等の動画配信で社会現象となり、人気は加速した。また、2021年の1月2日には、続編となる『ガンバレ人類！新春スペシャル』が放送された。主人公の二人が契約結婚を終え、出産を迎える物語となる原作の内容に新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う社会の混乱を絡めた内容になっている。タイトルの「逃げるは恥だが役に立つ」は、ハンガリーのことわざ「Szégyen a futás, de hasznos.」がもとになっており、ドラマ第2話では、平匡が「逃げ」としての結婚を選択し、皆に隠していることについて「恥ずかしい逃げ方だったとしても、生き抜くことの方が大切で、その点においては異論も反論も認めない」（第二話シーン13：p77※シナリオブックでの

ページ数) と紹介している。物語全体を通して、主人公たちは合理性を重視し、システムティックに物事を考える特徴がある。社会的な慣習、普通からは離れていても、自分たちにとって役立つ方法で生きていくということが目指される物語だ。



図 1 契約結婚を提案するシーン

海野つなみ『逃げるは恥だが役に立つ』第一巻 p44

2.2 『逃げ恥』のあらすじ

主人公は森山みくり (26 歳)。人文系の大学院を卒業した後、就職活動に失敗し派遣労働者として働いていた。しかし派遣切りにあつて無職となったため、父親の会社の部下であった津崎平匡 (36 歳) を紹介され、彼のもとで家事代行のアルバイトを始めた。平匡は IT エンジニアで高収入だが、恋愛に消極的な「草食男子」という設定。二人は、家事代行の雇用主と従業員という関係であったが、みくりと同居している両親が遠方に転居することをきっかけに、「住み込みの家事代行を行う契約結婚」を始める。外向きには専業主婦になる結婚だが行政書類上は事実婚関係となる生活である。両親や親戚、職場の同僚には契約結婚の事実を隠しながら、仲の良い夫婦を装うことに奮闘するなかで、恋愛感情が芽生えていく物語だ。その後、恋人になるにも「恋人契約」を交わし、プロポーズの場面においても互いのメリットや条件を確認するという「契約」を中心に置いた恋愛関係を発展させる。最終的に入籍し、みくりが企業に再就職すると、たどった経緯は異色であるものの、結果としては現代でよくみられる共働き世帯となった。その後は、みくりも平匡もフルタイムで働くなかでの妊娠・出産・子育てを描き、ストーリーは完結する。

2.3 主要な登場人物

森山みくり・・・主人公。大学院卒で臨床心理士の資格を持っている。

津崎平匡・・・みくりの雇用主／夫。システムエンジニアで合理主義的な性格。

土屋百合・・・みくりの叔母。外資系企業でキャリアを積んだ独身の50歳で、みくりを自分の子供のようにかわいがっている。

第3章 フェミニズムの系譜と第三波フェミニズム

3.1 フェミニズムとは

本研究では、『逃げ恥』とポストフェミニズム、及び第三波フェミニズムの関係性を中心に説明し、『逃げ恥』の特徴を捉える。そのために本章ではポストフェミニズムと第三波フェミニズムの特徴を説明するが、この二つのフェミニズムの潮流の特徴を示すには、それ以前のフェミニズムを説明する必要がある。それぞれの時代で、誰が、何を訴えてきたのかを整理することで、以降の潮流が抱えている意識や残っている課題を捉えることができるだろう。また、フェミニズムは世界中で展開の見られる運動であるが、対象者や達成の度合いはそれぞれの地域で異なっている。本研究では、日本のフェミニズムについて中心的に考えていく。

日本におけるフェミニズム理論と潮流の系譜を説明する前に、フェミニズムとはなにかを示しておく。「フェミニズム」とは、「女性の特質を備えている」という意味のラテン語(femina)から派生した言葉で、1980年代に「ウーマニズム」に代わって男女平等の理論や女性の権利運動を指して使われるようになった。日本では、フェミニズムの訳語として「女権拡張論」(戦前)や「女性解放論」(1960年代以降)が使われていたが、現在では女性の解放を目指す思想と運動を広く「フェミニズム」と呼ぶようになっている。(杉本 2010 : 21)

「女権拡張論」、「女性解放論」と運動の名称が変わってきたように、フェミニズムの運動にはそれぞれの時期や基盤となった理論の特徴があり、大きく四～五つほどの潮流にまとめられている。後述する「第一波フェミニズム」や「第二波フェミニズム」、「第三波フェミニズム」、「ポストフェミニズム」がそれらの潮流の一部である。本研究では、それぞれの潮流の特徴、つまりそこで獲得や改善が目指されたことや、主張の基盤となったフェミニズム理論を順に説明する。

3.2 第一波フェミニズムの理論

第一波フェミニズムとは、一般的には英、仏、米において十八世紀に始まり、十九世紀に広まった女性参政権獲得運動を指す。その時代、先進各国では個人の法の下での自由と平等が宣言されたが、その「個人」には女性は含まれておらず、活動家らは女性の参政権獲得を訴えた。一方、日本で「第一波フェミニズム」と後に称されることになる動きは、同じく女性参政権の獲得を目指した運動であるが、時期としては19世紀半ばから20世紀初めにかけて展開された。平塚らいてふを中心に「母性保護論争」「婦人参政権運動」「婦人労働運動」として展開された。ここでの運動は、女性参政権獲得を中心課題としたものであり、土台とな

っている考えは、リベラル・フェミニズムと社会主義フェミニズムであったと位置づけることができる。(杉本 2010 : 22-23)

●リベラル・フェミニズム

リベラル・フェミニズムは現存の社会体制の中で女性が男性と同等の権利獲得を目指すもので、その権利とは、教育、職業、政治という公的分野においてである。また、その発展的理論であるグローバル・フェミニズムとは、各国の歴史的制約に枠づけられている運動を地球規模で再構成しようとする運動である。(杉本 2010 : 22-23)

●社会主義フェミニズム

一方、社会主義フェミニズムとは、社会主義革命によって女性の経済的自立を阻む資本主義社会を変革することにより、階級抑圧とともに女性抑圧も解消されるという立場をとる。(杉本 2010 : 23)

この二つのフェミニズム理論によって、ブルジョワ女性運動と労働運動が中心となる第一波フェミニズムが生まれた。

3.3 第二波フェミニズムの理論

第一波フェミニズムが女性参政権獲得を実現して静まると、次に「女性らしさ」や「女性役割」を問題として訴える運動が始まった。それが第二波フェミニズムの始まりとなる女性解放運動であり、日本では全共闘運動をきっかけの一つとして「ウーマンリブ運動」(1970年代)が始まった。

そしてこのウーマンリブ運動を支えていた理論は、ラディカル・フェミニズムと称される。(杉本 2010 : 23-24)

●ラディカル・フェミニズム

ラディカル・フェミニズムとは、「家父長制」という概念を用い、「性支配からの解放」、「女性役割の否定」、「家族の否定」を主張することで、女性抑圧の原因は制度などの社会的領域での男性による支配だけでなく、文化や慣習といった私的領域における支配にもあることを示した。ここで言われる文化には、漫画や映画、生物学、心理学、家族社会学なども含まれるとされ、女性役割を維持強化していると主張した。例えば全共闘運動においては、女性が運動に参加しようとしても表には出られず、軽食づくりを任されたという背景から女性役割への批判につながった。

このラディカル・フェミニズムを基盤とした第二波フェミニズムによって、政治分野にとどまっていた日本のフェミニズムの追究対象が社会生活全般へ押し出された。(杉本 2010 : 24-25)

3.4 ウーマンリブ運動後の第二波フェミニズムの理論

国連が 1975 年を「国連婦人年」とし、1976 年から 1985 年を「国連婦人の 10 年」と制定したことにより日本でも男女平等政策の推進が後押しされ、1990 年代には、女性差別撤廃条約の中で求められていた「男女共同参画社会基本法」が成立した。しかしその一方、2000 年代にはこれまでのような男女平等・ジェンダー平等推進の動きに対し「ジェンダー・バッシ

ング」と呼ばれたバックラッシュ（揺り戻し）が生じた。（杉本 2010：27-36）

この時期、つまり第二波フェミニズムの後期に運動の基盤となったフェミニズム理論には以下が挙げられる。

●マルクス主義フェミニズム

社会主義フェミニズムが主張した「階級支配」とラディカル・フェミニズムが主張した「家父長制」を結びつけ、現代女性の抑圧原因は「家父長制資本主義」であると結論付けた。日本では1973年にジュリエット・ミッチェルの「Woman's Estate」が紹介され、主に上野千鶴子によってこの理論が広められている。（杉本 2010：25）家事労働に賃金を求める運動もマルクス主義フェミニズムから生まれている。江原は、女性を「資本主義の外」の存在とみなさず、中からの別視点として変革分析が可能な存在だと主張している。（江原 2021）

●エコロジカル・フェミニズム

エコロジカル・フェミニズムとは、自然の生態系と調和のとれた生活を目指すエコロジー主義とフェミニズムを統合したもので、自然としての「女性性」「男性性」を重視する考え。イヴァン・イリイチが支持し、日本では1983年に青木やよひが紹介したことで盛り上がった。（杉本 2010：25）江原は、イリイチの評論について、男性の「理想社会」を女性に仮託して語っているだけと批判している。（江原 2021：34）

●ポスト・モダンフェミニズム

1980年代半ばに日本で紹介されたポスト・モダンフェミニズムは、西欧文化・西欧社会の思想に女性抑圧の原因があるとしたもの。その原因とは、「ファルス中心主義的エディプスの主体の内面化」を強制されることであり、近代資本主義社会において強化されたとする。（杉本 2010：26）

なお、「第何波」という言葉からも表現されるように、フェミニズムの運動や理論には、はっきりと切れ目がない。このため、この第二波フェミニズムの時期がいつまでであるかについては諸説あり、国内外でもズレがあるとの見方がある。後述のように欧米では、第二波は1990年代までで、日本においては、第二波の継続に相当する状況が2000年代半ばまで続いているとみられる。

3.5 現代のフェミニズム

これまでの第二波フェミニズム、特に欧米の運動では、白人中流女性の立場を「女性の立場」として論じる傾向があり、ポストモダン思想の立場から、モダン的な二項対立的概念枠組みが問題視されたため、セクシュアリティ・階級・階層・エスニシティ・人種・年齢・障害の有無などを異にする多様な「女性」へと目を向けることが目指された（木村編 2013：9）。竹村和子は、バックラッシュ以降のフェミニズムを表現する用語として「ジェンダー研究」「第三波フェミニズム」「ポストフェミニズム」などが使われることが多いと述べているがそのいずれも、フェミニズムへの自己批判と社会変化への対応によって形を変え運動されているとしている。（竹村 2003：1-20）

では、それらのフェミニズムは具体的にどのような理論であるのか。現在代表的なフェミ

ニズムの潮流はポストフェミニズムと第三波フェミニズムである。

3.5.1 ポストフェミニズム

菊池によると、ポストフェミニズム論とは、カルチュラルスタディーズの流れを汲んでアンジェラ・マクロビーが土台を築いたもので、何か特定の思想や政治的立場のような明確な内容をもつものではなく、現在の社会に広く浸透している社会意識や言説の一定の傾向を指している。(菊池 2019 : 71) 例えば、「第二波フェミニズムにおいて獲得した「自由」で「自立」した女性像を学び、制度も整備されてはいるものの、ロマンスや伝統的な女性的価値を捨てフェミニズムの示した女性像に従って生きることには不安を感じている」女性たちの意識は、ポストフェミニズム的であると紹介される。そしてその女性たちは性的対象から性的主体となっていくことが目指される。

高橋幸 (2020) は、英語圏のポストフェミニスト女性の考えを分析するため、2013年から2014年ごろにソーシャルウェブサービスでハッシュタグ#WomanAgainstFeminism (フェミニズムに反対する女性) をつけて発信された主張を調べ、以下の表にまとめた。

この運動では、女性が主張を書いた紙とともに自分を撮影し「Tumblr」に投稿した。「Tumblr」とは、写真や文章、音楽などを自由に投稿できるウェブログサービスである。高橋は信ぴょう性のあるものを集め、内容から属性別に分けた。その6つの属性は、「1 家庭生活重視」「2 恋愛・性愛重視」「3 『女性』ではなく『個人』」「4 平等主義」「5 フェミニズムイデオロギー批判」「6 男性問題に言及」である。本研究では、大きく分けてポストフェミニズムに分類される1～4のコードに注目する。

表 1 「私がフェミニズムを必要としない理由」のコーディング結果 (高橋 2020 : 47)

コード	全体に占める割合 (個数)		
1 家庭生活重視	11.2% (37)	「女らしさ」重視 19.4% (64)	ポストフェ ミニズム 67.3 % (221)
2 恋愛・性愛重視	8.2% (27)		
3 「女性」ではなく「個人」	38.7% (127)	「個人」主義	
4 平等主義	9.1% (30)	47.8% (157)	
5 フェミニズムイデオロギー批判	28.3% (93)	アンチフェミニズム 32.6% (107)	
6 男性問題に言及	4.2% (14)		
計	100% (328)		

ポストフェミニズムに関してこの分析を見てみると、最も多くの主張に共通 (全体の38.7%) しているのは、『女性』ではなく、『個人』として自己をみるという意見だ。例えば、「自分は、フェミニズムで扱われる『被害者』としての女性ではなく、フェミニズムが終わった平等な社会に生き、個人として意思決定をし、成功している」と語る。

また、「女らしさ」を重視する意見も多い (全体の19.4%)。『妻』や『母』の役割を担うことは私らしくなくなることはない」「進化の過程における男女差があり、男性による強制

ではない」(家庭生活重視)、「私の彼氏のために私がセクシーであることを私は愛している」(恋愛・性愛重視)といった内容が主張されている。(高橋 2020 : 45-54)

ここから、ポストフェミニズムの思想をまとめると、まず前提として、「男女において不当な差別はなく、あるように見えてもそれは『区別』や『差異』、もしくは『自由な意思の結果』に過ぎない」という捉え方が出発点にあるということが分かった。

ここで日本におけるフェミニズムを考えてみたい。第二波フェミニズムによって社会制度面での整備は進んだ。例えば、就業における機会の均等は法律的には保障された。しかし、職種別の男女差や育休取得・時短勤務の男女差、平均賃金の男女差、パワハラ・セクハラ問題等、様々な場面で女性の不当な扱いは残っている。入社後の女性の処遇改善に関しても、企業の努力によっているところが多い。そのような状況で、女性がとるキャリア選択やふるまひは、自由な選択の結果であるといえる人は多いだろうか。内閣府の男女共同参画社会に関する世論調査(2019)を見てみると、各分野で男女が平等であると思う割合は、「家庭生活」で45.5%(男性が優遇されている44.9%)、「法律や制度の上」で39.7%(男性が優遇されている46.9%)、「社会通念・慣習・しきたり」などで22.6%(男性が優遇されている70.1%)である。分野別では、「学校教育の場」「自治会やPTAなどの地域活動の場」「家庭生活」「法律や制度の上」「職場」「社会通念・慣習・しきたり」「政治の場」の順で男女が平等であると思う割合が低くなっている。男女が平等であるべきと学校で習っているものの、社会に出てみると、変えにくく意見しにくい慣習として差別が依然として残っている。そのような状態で過ごさざるを得ない状況が現在の日本なのではないだろうか。

では、ポストフェミニストが認めているという(第二波)フェミニズムの成果とは何であるのか。高橋は、「男女差別が無くなった」というポストフェミニストの現状認識について、「『女性』として生きてきた自分の経験や日常生活の中での実感といった個人的なものにもとづいている。そのため、女性にとって不利な社会構造が残っているという客観的事実を示して『男女差別が無くなったとは言えない』という応答をしたところで会話はかみ合わないものになってしまう」(高橋 2020 : 28)と述べている。日本でも、フェミニズムに関連した苦勞を吐露するようなSNSでの投稿には、「私の場合はそうではなかった」「自分はそのような状況を見たことがない」といった返信コメントが付くのを目にする人が多い。また、「女性の地位向上は、「経済発展」や「民主化」「教育の成果」に伴い達成されたものでフェミニズムの成果ではない」(菊池 2019 : 81-82)という考えも登場し、「それらが達成されてもなお性差別の撤廃を訴えるフェミニズム」への反感もネット空間を中心に多い(菊池 2019 : 81)。

「男女共同参画社会」が目指される制度的整備と教育のなかで、男女は平等であるべきだという考えは持っていても、男性優位の社会構造を客観的にとらえられていない場合や、慣習として当たり前振る舞いが差別的であると気づいていない場合もあるということだろう。

また、フェミニズムの成果を社会がどのように認識しているのかを考える際には、男性がフェミニズムをどのように捉えているかを知ることにも参考になる。電通総研が実施した18歳~70歳の男性を対象とした調査によると、日本においては、若年男性ほど「フェミニストが嫌い」であり、「女性活躍を推進するような政策を支持」しないと答えている。この結果に対して関西大学の多賀は、「すでに男性優位社会の恩恵を受けて年長になった男性に比べ、将来

の見通しが立ちにくい若い男性の方が、女性支援を男性の疎外と受け止めやすいのではないかとコメントしている。(電通総研 2021)

日本において第二波フェミニズムは、法律の制定という目に見える分かりやすい成果をもたらした。しかし、生活の全般や意識のレベルにおいて平等が達成されているとはいえない。むしろ、終わらないバックラッシュや、フェミニズムの役目はすでに終えたというポストフェミニズム的な言説によって、生活レベルでの差別に苦しんでいる人には、第二波フェミニズムの成功を実感できないばかりか、弊害が意識されてしまう社会状況となっているのではないかと。こうした状況をふまえ、フェミニズムの課題と使命はまだなくなっていないとして、従来とは異なる形でフェミニズムを実践しようと試みる立場が、以下で説明する第三波フェミニズムである。

3.5.2 第三波フェミニズム

第三波フェミニズムと称される動きについては米国での運動を主な対象としてではあるが、田中東子が説明している。第三波フェミニズムとは、「1990年代から現在まで、グローバル化と新自由主義イデオロギーが蔓延する後期近代の時代に登場した新しいフェミニズムの潮流」である。彼女らは、これまでのフェミニズムが使用してきた男女の二分法的概念そのものを問い直し、人種や階級の違いだけでなくセクシュアリティや経済的状況の異なった多様な「女性」に目を向ける。また、別の側面として、「女らしさを肯定的にとらえ、多様な女らしさのあり方を実現していこうとする文化政治的運動(カルチュラルポリティクス・ムーブメント)」という面もある。(高橋 2020 : 30)

では、その担い手とはだれか。田中の説明を引用すると、「第二波フェミニズムの理想が自明視されるポストフェミニズム時代に生まれ教育を受け、他方ではバックラッシュ期にフェミニズムと出会ったがゆえに自らをフェミニストであるとするにはいささかの戸惑いを感じ、後期近代の個人主義イデオロギーを無意識的に内在化しつつもその規範化に葛藤し続けている女性たち」である。(田中 2019 : 323) 言い換えると、男女が平等であることは当然のことであり、自らも女性の権利を守るという意味でフェミニストではあるが、これまでのフェミニスト「らしく」政治的に活動して攻撃を受けるのは避けたい、また、「男性のような女性」を演じることに違和感を覚えている女性たちといえる。

田中は、日本における現在がこの米国での 1990 年代に当てはまるのではと補足している(田中 2019 : 319)。日米間には年代のズレだけでなく、内容にも違いがある。以前のフェミニズムと同様に、日本の第三波フェミニズムは、人種や階級がほとんど問題にされない。あくまで対象とされているのは日本人の働く女性や専業主婦だろう。そのため、第三波フェミニズムの特徴の一つである「交錯性(インターセクショナリティ)」は、日本においてその意味する範囲が狭くなっているという特徴がある。

第三波フェミニズムの思想はまだ明確に理論化されていないが、田中はその運動の特徴として、「私的アジェンダを公共の場で政治アジェンダに変えていこう」とした第二波に対し、第三波では「私的アジェンダを私的空間そのもので問い直す」ことが目指されているという点を挙げている。(田中 2019 : 327) メディアコンテンツに日常的に触れる情報社会となった

今日においては、フェミニズムがポピュラー文化という私的空間で展開されることがフェミニズムの「常識」を生み出しているのであり、ポピュラー文化がフェミニズム闘争にとって重要性を増してきている空間になっている。(田中 2019 : 329)

3.5.3 現代フェミニズムまとめ

以上の説明を踏まえると、ポストフェミニズムと第三波フェミニズムの担い手もっている意識には、共通している部分がある。「性差別はあるべきでない」という想いを共有し、「フェミニスト」とは名乗りづらい理由を持つ女性たちが担っているという点で同じだ。では、両者の違いは何だろうか。

大きな違いは、フェミニズムを先に進めようとするか否かだ。シェリー・バジェオンは、ポストフェミニズムは、「女たちが、自分たちの状況にもっとも合うと感じられるようにみずからのアイデンティティを構築する能力をフェミニズムが制限している」と示唆し続けているが、第三波フェミニズムは、後期近代において「生きられた経験がますます複雑になってきている」ため、「女たちがその生を特徴づけている矛盾により引きつけてフェミニズムとの関係を構築」することで、「フェミニズムの価値と実践についての既存の定義に対する深い異議」を申し立てると説明している。(バジェオン 2020 : 169) つまり、ポストフェミニズムは、フェミニズムを完了されたものとみなし、女性性を積極的に肯定する。一方で第三波フェミニズムは、フェミニズムは達成されていないものとして方法論・範囲・対象を広げて議論を続ける実践であるとまとめることができる。

第4章 『逃げ恥』とフェミニズム

4.1 『逃げ恥』とポスト&第三波フェミニズム

ここで、『逃げ恥』について考えてみよう。現代におけるフェミニズムの兆候を上記のようにポストフェミニズムと第三波フェミニズムとして整理したが、『逃げ恥』という作品に表現されている思想は、どちらに近いといえるだろうか。

まず、『逃げ恥』はどのような人に人気であったのかを確認しておこう。プロデューサーの那須田によると¹、本作品の視聴者層で最も厚かったのは、F2層だった。マーケティング用語でのF2層、つまり、35～49歳の女性に熱く支持されたということを指す。この年齢層の特徴をフェミニズムの変遷に関連して考えてみると、当時35～49歳の女性たちは、ポストフェミニズムや第三波フェミニズムを出現させた女性たちに対応しているのではないか。第三波フェミニズムやポストフェミニズムを生み出した女性たちとは、「第二波フェミニズム(日本1970年代)の後、女性の社会的地位向上の教育を受けたにもかかわらずバックラッシュの時期(日本2000年代)に成長したことで女性性に矛盾を感じた」人々であった。であるならば、逃げ恥を支持した女性たちが、ポストフェミニズムや第三波フェミニズム的な考え方を持っている人々である可能性は十分ある。

また、前述したように第二波フェミニズムは私的アジェンダを公共の場での政治アジェンダに変えていこうとしたのに対して、第三波フェミニズムは、情報技術とメディア環境が変化するなか、私的アジェンダを私的空間そのもので問い直すことが政治的な解決に結びつくと考えているのだと田中は考察している。『逃げ恥』は、まさに「私的なメディア空間での問い直し」を実現している。本作品では、視聴率が高かったというだけでなく登場キャラクターの苦悩に対する共感が SNS 上で見られることが多かった。ドラマを観ることによって女性問題や生きづらさに関する問題を視聴者は学ぶにとどまらず、SNS で話題になることによって専門家や当事者を含む人々の意見を目にするようになる。例えば上野千鶴子は Twitter で下のように反応している。

「逃げ恥」のシナリオ作家は主婦論争の都留重人論文を読んだのだろうか？
「私が自分の女中と結婚したとする。私が女中に支払っていた給料を払わなくてよくなる。やっていることは同じなのに、その分だけ、日本の GDP は減る」
...これはおかしい、というのが「不払い労働」論だった。

ここで上野は、『逃げ恥』のなかでフィクションとして描かれていた設定を学術の視点で抽出し、過去のフェミニズム運動の歴史や GDP といった構造的な話題へとつなげている。日常、学問の場とは距離がある市民にとっては、このような接触が、フェミニズムについて考え始める良いきっかけになるだろう。「家父長制」といった私的領域において根深い差別構造を解決するために私的領域からのフェミニズム的意識や運動が不可欠であるとき、以上のような体験がまずは重要となる。

このように、ポピュラー文化のなかで確認されるフェミニズム的疑問をメディア空間で共有し、共感できる仲間や社会をつくることで、自然な政治的変革へつなげることを期待することが第三波フェミニズムの特徴的な動きであり、『逃げ恥』の盛り上がり重なっているとみることができるのではないだろうか。

さらに、第三波フェミニズムの特徴である「交錯性」も欧米ほど多様でないにしても、作品中で表現されている。「交錯性（インターセクショナリティ）」とは、アイデンティティや属性の重なりや複雑性を説明する概念である。逃げ恥で登場するキャラクターは、「いわゆる女性」のように一般化できないキャラクターばかりだ。同性愛者やシングルマザー・ファザー、亭主関白な夫、帰国子女、専業主婦、キャリアウーマンなど様々に登場するが、カテゴリー化されて想像される人物像以上に、ひとり人間としての特徴や内面の思いを重視して描かれている。

4.2 菊池夏野の『逃げ恥』批評

ところで、菊池夏野の『逃げ恥』批評（菊池 2021 : 121）を見てみると、『逃げ恥』は物語内容において、「ポストフェミニズム的要素」にあふれていると述べられている。例えば、みくりの叔母である土屋百合は、女性が若さにとらわれていることを「女の呪い」として、若い女性に対して、「自分に呪いをかけないで。そんな恐ろしい呪いからはさっさと逃げてしまいなさい」と諭す。菊池はこの場面について、年齢差別を個人の呪いとするすることで、年齢差別を作り出す社会構造の問題を「すでに終わったもの」として隠蔽していると批判する。そ

してこの女性差別を「すでに終わったもの」として過去に追いやる視線はポストフェミニズム的だと指摘している。はたしてそうだろうか。作品中、百合はこうも発言している。

「私が虚しさを感じることもあるとすれば、貴方のように感じている女性が、この国にたくさんいるってこと」(最終話シーン43 : p440)

このセリフに触れた読者／視聴者が、人々が気づかぬうちに呪いをかけられ、また自身にもかけてしまっているという状況を、「社会の構造的な問題」として捉えることは可能ではないだろうか。仮に、ドラマの若い女性が「個人的に自分に呪いをかけてしまっている」だけであっても、それはあくまでも「呪い」なのである。それは、「若さ」を自身の武器として肯定的にとらえるポストフェミニストに、いつの間にか若い女性たちが「なっている」状況を批判的に指摘する表現となる。百合に指摘された女性が何も答えられなくなるという反応からも、積極的な「若さ」の肯定であるとは言えない。百合がその呪いを指摘し、若い女性に対して「逃げなさい」と諭すことは、ポストフェミニズムへの批判の意味を持つ。このシーンによって、視聴者が「私も悪しき女性差別・年齢差別の残る社会に生きている」と気づき、社会構造の変革につなげていくことが期待されている。

また、作品のなかで50代女性としての百合の生き方は何度もフォーカスされる。そのなかで、女性差別・年齢差別が未だに社会問題として残っているということが表現されている。百合は結婚を選ばずにキャリアを築き上げてきたため、出産で出世ルートから外れた女性社員からは、女性の希望として期待されている。一方で、男性社員からの風当たりは強い。百合が、自社製品の広告がコンセプトとずれて作られていたことについて男性上司に直談判した際は、以下のように陰口を言われてしまう。

「融通が利かないよなあ、土屋は」「未だに独身なのがわかる気がします」「だから必死なんだよ」(第9話シーン50, 52 : p360)

ここには女性に対する差別的な意識や偏見が反映されている。「仕事上であっても上司に抗議するような振る舞いは女性らしくない」、「女性らしくないひとは男性に好かれなから結婚できない」といった考えを見てとることができる。

百合の生活をみくりの生活と交互に見せることによって、仕事の領域と家庭の領域の両面での女性の苦悩を表現している。こうした描写を見る限り、女性差別を終わったものとして過去に追いやるような姿勢が本作品にあるとは言えないだろう。菊池のように『逃げ恥』をポストフェミニズム的作品として定式化することは難しい。

4.3 愛情の搾取という問題

菊池は、みくりのセリフに登場する「愛情の搾取」についても、「フェミニズムの空洞化」であると批判している。「愛情の搾取」とは、賃金が発生する契約結婚関係だった二人に恋愛感情が芽生えた結果、平匡が「きちんと入籍して結婚しましょう」と提案したことに対しての言葉だ。正式に結婚し生計を完全に同一にすることによって、これまでみくりに支払われていた賃金を二人の生活費や貯蓄に回すことができるという平匡の提案を受けてみくりは以下のように抗議する。

「それは、好きの搾取です!」「好きならば、愛があるなら何だってできるだろうって、そ

んなことでいいんでしょうか？」「わたくし森山みくりは、愛情の搾取に、断固として、反対します！」（第10話シーン92：p412）

『逃げ恥』のこのセリフを、フェミニズム的主張として高く評価している例が散見されるが、菊池の場合は以下の点から批判する。フェミニズムが発見したのは、「愛情の搾取」ではなく、「家事労働の搾取」である。母性や愛情というイデオロギーによって「家事労働」や育児を強制される構造があるということをマルクス主義フェミニズムは指摘したのであって、『逃げ恥』のように「すでにある愛情」を搾取されることとは異なると菊池は指摘する。

ここで、二つの状況を整理する。マルクス主義フェミニズムが指摘した搾取の構造は「結婚した二人のうち、女性の方には家事や育児に適した『母性』や『愛情』があるとされ、家事や育児を押し付けられるという構造」である。性別による役割分業という差別と搾取の構造であった。ここで言われている母性や愛情は、女性特有の愛情であるとみなされている。その帰属や押し付けがマルクス主義フェミニズムによって問題化されていた。しかし、『逃げ恥』の上記セリフで言われているのは、両者の関係性としての愛である。『逃げ恥』が指摘したのは、「家事労働とは本来は報酬が支払われるに値するものであるのに、二人の間に愛情があるとき、その労働は無償とされてしまうこと」であった。二者間の愛情の存在によって、経済的な合理性に基づいていた関係を不可視化してはならないという考え方である。契約結婚によって確保された権利が愛情を理由に消えてしまうことをみくりは危惧しているのである。両者は結果的に女性が家事労働を無償で担っている点で同様だが、家事労働を負わせる理由が異なっている。

たしかに、この二つの主張の論点は異なるため、従来のフェミニズムの主張を『逃げ恥』が受け継いだと捉えるのは間違いである。しかし、『逃げ恥』の主張は、フェミニズム的であると呼べないだろうか。

菊池は、「愛情の搾取」という言葉は「愛情」を自然化していると述べているが、愛情は主人公二人の恋愛プロセスから生まれたものである。恋愛によって二人の間に愛情が芽生えることは、フェミニズムが否定したり批判したりするべきものではない。後述のようにここでは、ロマンティック・ラブではなくコンフルエント・ラブというお互いの平等を前提とした関係性によって愛情が育まれている。問題なのは、その愛情が、自動的に結婚後の無償労働の理由へと持ち込まれるという点である。平等を前提としていたはずの愛情が不平等な関係性に持ちこまれ、それを根拠として契約結婚で保障されていた権利を剥奪されることにみくりは危機感を感じている。作中では、みくりの幼馴染の安恵が「いんや、現金収入大事だって、あたしも離婚して身に染みたもん。」（第10話シーン55：p394）と言っていることから、結婚したことによって家事労働を負担する方だけが、心理的にも自由に使えるお金が手に入らなくなるということも問題として意識されているだろう。現代の女性問題の解決を目指すフェミニズムと言える。

また、「愛情の搾取」の構造は、立場を男性に置き換えて考えることができる。「夫婦の間には愛情があるから、家事労働は無償でもかまわない」という論理は、性別に関係なく成立するため、その差別性を気づかせる。視聴者がこのセリフに男性をあてはめて考えたとき、違和感を覚えるならば、それは女性に対する差別であると気づかせる効果を持つのではない

だろうか。

以上のように、マルクス主義フェミニズムが指摘した女性の搾取問題と『逃げ恥』が示した問題は、異なるものではあったが、女性差別の構造的問題を指摘しているという点でどちらもフェミニズム的であり、フェミニズムの空洞化になっているとは言い難い。

第5章 コンフルエント・ラブとは

5.1 ギデンズのコンフルエント・ラブ

菊池は自身の逃げ恥論考において、『逃げ恥』では「コンフルエント・ラブ」が実践されていると指摘している（菊池 2021）。さらに、そのコンフルエント・ラブがフェミニズムの問題を不可視化する役割を果たしており、結果的に作品はポストフェミニズム的になっているという。さて、コンフルエント・ラブとは何だろうか。本章では、アンソニー・ギデンズの唱えた「コンフルエント・ラブ」の概念について説明する。

コンフルエント・ラブとは、近代の「ロマンティック・ラブ」に対して現代に生じているとされる愛情の概念である。まずロマンティック・ラブとは、「個人的魅力と相性に基づいて互いの愛情を育むことが期待されている」（ギデンズ 1993 : 393）理念で、「相手に想いを注ぎ理想化することと、将来の展開の道筋を予想し明示していくことという意味合いを担う」（ギデンズ 1995 : 73）愛情であると説明されている。ロマンティック・ラブの理想とする婚姻は、情緒的個人主義の実践という意味において、前近代的な婚姻と比較し自由であるように見えるが、「自己投影的同一化」という互いの差異のうえでの一体性が追求されるため、男女の差異は重要であり、女性は男性に隷属すべきという考えも強化される（ギデンズ 1995 : 95）。一方、コンフルエント・ラブは、「能動的な、偶発的な愛情であり」、「関係性の継続を価値のあるものとするに十分な利益が二人の関係から互いに得られる点を、双方の側が『追って沙汰のあるまで』認め合うこと」（ギデンズ 1995 : 97）である。つまり、男女、同性、その他いかなる種類のカップルであっても、お互いの立場が対等であることを前提とし、セクシュアリティといった個人的なことから、話し合いと合意によって関係性を形作っていく愛情の形がコンフルエント・ラブといえる。

5.2 コンフルエント・ラブと民主制

本研究では、コンフルエント・ラブと民主制のつながりを説明することで、『逃げ恥』によるフェミニズムへの貢献——第三波フェミニズムの実践——の説明につなげていく。本節では、まず、コンフルエント・ラブが、「純粋な関係性」という概念を経由して、民主制と大きく関わっていることを説明する。

「純粋な関係性」は、コンフルエント・ラブの延長にある。夫婦や恋人関係のような私的領域で実践されるコンフルエント・ラブの概念を、親子関係や友人関係の領域に押し広げて考えた関係性が「純粋な関係性」だ。ギデンズによると、「純粋な関係性」とは「お互いのコミュニケーションが双方に利得をもたらすがゆえに持続される、情緒的コミュニケーション

にもとづく」(ギデンズ 2001 : 97) 自由で対等な関係性である。さらに、「純粋な関係性」の成立条件とは、自立(自己という再帰的自己自覚的達成課題の首尾よい実現)によって相手への敬意を持ち、暴力を禁止し、関係性の開始・継続・解消のすべての意志決定に参加でき、互いに説明義務を負うこと(ギデンズ 1995 : 278-288)である。つまり、適用される領域は異なるが、コンフルエント・ラブと「純粋な関係性」が持つ、平等や権利義務に関する意識は重なっている。

ギデンズは、この「純粋な関係性」が個人生活の民主化の実践となっていると主張する。ここで民主制の意味を確認しておく、民主制とは、「自由で対等な自己開発をおこなう権利だけでなく、(配分)権力の憲法に基づく規制」(ギデンズ 1995 : 274)であり、そのような民主制が維持される民主主義社会では、「原則として、すべての構成員は平等であり、権利と義務の平等ゆえに——なにはともあれ原則として——お互いに敬愛し合うようになる」。そこにおいて、「自由に意見を交換し合えることは、民主主義社会の必要条件のひとつ(ギデンズ 2001 : 98)」でもある。つまり、個人生活における「純粋な関係性」なくしては、話し合いが中心となる民主制は本当の意味では成立しないということである。例えば、女性が男性に自己投影的同一化を図るロマンティック・ラブのように、対等な話し合いを前提としない関係性が個人生活において実践されているとき、政治分野においても、同様の振る舞いが許容される。つまり、一度選んだ政治家に意思決定を任せて責任を丸投げするような姿勢である。これは、厳密には民主制を実践しているとは言えない。議論の場が開かれ、ルールを作ることなどの、権力を抑制する機能がなければならない。

以上のように、「純粋な関係性」は民主制の理想的な姿と対応している部分が多く見受けられる。『逃げ恥』の人物を引用すると、みくりが平匡と平等・対等であるという意識をもってコンフルエント・ラブを実践することや、みくりが叔母の百合や友達の安恵と権利義務の意識をもって「純粋な関係性」を実践することは、個人生活における民主主義の実践となっているということである。

では、コンフルエント・ラブ及び純粋な関係性と民主制が深く関係していることは、何を意味するのか。ギデンズは、「情念の民主主義(純粋な関係性の実践)を実現することが、進歩的な市民文化を醸成するための必要条件。寛容(多様性等に対しての寛容な態度)などの民主的な態度をやしなうための場が市民社会にほかならない(カッコ内は筆者補足)」とし、そして、「市民文化の再生をはかったうえで、下からの改革を積み重ねてはじめて、開かれた民主主義社会はできあがる」(ギデンズ 2001 : 118)と説明している。さらに、近年各国の政治は「墮落したビジネス」と言われるほど汚職にまみれ、従来型の政治では開かれた情報社会に対応しきれなくなっていること、また、NPOやNGOの役割が増える一方で、環境問題や人権、家族政策などの市民が関心を持っている政治問題を議会が議論することは少なくなってしまうということを指摘し、民主制の民主化の必要性を説く。政治における民主主義をより正しく機能させることは、政府といった上からの改革では成しえず、情念の民主主義——「純粋な関係性」の実践——を実現することで、初めて達成される。民主主義を意識的に実践することによって、政治における民主制が再帰的に機能するとギデンズは主張する。

第6章 ハイ・モダニティ

6.1 ハイ・モダニティとは

前章では、コンフルエント・ラブと民主制の結びつきについて説明し、コンフルエント・ラブを含む純粋な関係性が民主制を再帰的に、より徹底させることにつながっていることを示した。このように、近代の仕組みをより徹底させた状態を指す言葉が、ギデンズのいう「ハイ・モダニティ」である。

ただし、ハイ・モダニティは、「コンフルエント・ラブ」や「純粋な関係性」だけで説明されるものではない。本章では、ハイ・モダニティのより一般的な説明をすることで、第三波フェミニズムにつながる点を洗い出していく。

これまで述べたように、ギデンズは、モダニティはモダニティそれ自体が持つ再帰的な機能によって後期近代（ハイ・モダニティ）へと移行すると主張する。モダニティにおいては、知識環境の再帰的組織化によって未来が絶えず現在に引き込まれている。というのも、モダニティ発展のカギは、時間と空間の再組織化に伴う脱埋め込みメカニズム——社会関係を特殊な位置づけの呪縛から解放し、広範な時間—空間の中に再統合するメカニズム——によって制度的に再帰性が表れることであつたからだ。ハイ・モダニティ社会とは、そのようなモダニティの再帰性が、メディアの発達やグローバル化によって、より徹底され、制度的文脈だけでなく、個人の自己アイデンティティの形成及び親密な関係性においても同様に機能する社会を指す。遠く離れた出来事が情報社会の中で身近な出来事や親密な関係性に影響を及ぼすのだ。モダニティにおいては、すべての知識は原則的に仮説として修正に開かれながら、専門知識のシステムとして蓄積されてきた。そのような多様な選択肢と可能性による混乱の中で、私たちは自己を再帰的に形成しなければならない。（ギデンズ 2021：9—22）中西は、ギデンズのハイ・モダニティ論について、ポストモダニティ論と比較しながらこう説明している。「ポストモダニティ論は、近年の認識論の解消や秩序の崩壊に焦点を当て、真理の主張は状況依存的なもののみならず。これに対して、ハイ・モダニティ論は、秩序の崩壊や分裂を生み出す制度を特定化し、近代が再帰的自己アイデンティティを可能にしていると、肯定的にとらえる。（中西 1998：28）」

また、その不確実性と多様な選択肢が存在する環境で生きるためには、信頼という概念が必要である。それはどういうことか。例えば前述のように、社会世界の変化は、親密な関係性にも大いに影響を及ぼす。その関係性は、外部の抽象化システム（情報化・マニュアル化によって社会世界に集約された知識）から再帰的に変化を取り込むからだ。しかし、多様な選択肢のすべてを取り込むことはできず、また、常に改訂の可能性を含むため、すべての選択肢の詳細を検討できるわけではない。常に関係性と抽象化システムとのつながりは部分的であり、そのために「信頼」という態度を必要とする。信頼は、関係性の内部での、相手や関係性自体に対するコミットメントであり、外的基準とは切り離されている。親密な関係性においても、内部で完結する「信頼」を持つことによって、不確実で多様な選択肢を持った環境から情報を取り込み、再帰的に関係性のアイデンティティや自己アイデンティティを構成するということが可能になる。

6.2 ハイ・モダニティと第三波フェミニズム

ここで、第3章で説明したフェミニズム理論の時代的変遷とギデンズのコンフルエント・ラブ、ハイ・モダニティ論を接続してみよう。第3章で説明した第三波フェミニズムを生み出した社会は、ギデンズの説明するハイ・モダニティ社会と対応している。

第三波フェミニズムは、グローバル資本主義の台頭、情報技術の拡大、自然破壊の危機、セクシュアリティの多様な形態、人口統計的な変化、経済活力の低下などが特徴の主な要素である（バジェオン 2020：169－171）。これらの要素は、ギデンズの後期近代（ハイ・モダニティ）の説明で示された要素と大きく重なっている。では、ハイ・モダニティの「再帰性」と第三波フェミニズムはどのように対応しているだろうか。再帰性のカギは、時間と空間の再組織化に伴う脱埋め込みメカニズムであった。フェミニズムの運動や女性としての経験も、それぞれが経験された時間と空間から切り離され、一般化されることによって抽象的システムの中に蓄積されていった。しかし、蓄積された知識が示すフェミニストとしてのアイデンティティは固定的なものであった。例えば、第二波フェミニズムの時期には、フェミニストのアイデンティティは、女性役割を拒否し仕事を続ける「男性のような」女性が中心であった。一方で、高度な情報化やポピュラー文化空間での交流によって、複数の多様な経験が抽象的システムの中に出現し、女性性のなかに複雑性を認める動きとしての第三波フェミニズムが誕生した。ポピュラー・カルチャーの中で、現代のジェンダーのさまざまな理想を「良い」「悪い」の安直な二分法的観点から単純に示すことを嫌い、支配的な女性性の表象に抵抗したり転覆させようとしたりするのが、第三波フェミニズムの手法である（バジェオン 2020：170）。そして、その活動の場となる情報空間・ポピュラー文化空間の開かれた性質によって、フェミニズムが女性学を学んだ者や実際に明らかな被害を受けている者のための専門的な話題であることにとどまらず、市民生活における一般的な関心となっていくことが目指されている。

次に、自己アイデンティティの観点から、ハイ・モダニティと第三波フェミニズムの関係性を探る。ハイ・モダニティにおいては、自己は再帰的プロジェクトとなる。自分はどのようなアイデンティティを持つ人間であるのかを考えるための選択肢は無数に転がっている。女であれば、妻として夫を支えなければならないわけではないし、パワハラやセクハラを受ける被害者としてのフェミニストにならなければならないわけでもない。一方でポストフェミニズム的にフェミニズムを退け、伝統的な女性の価値を内面化することや、女性の成功を自由な選択の結果として見ることは、構造的な不平等の要素を不可視化してしまう。つまり、ハイ・モダニティに適応した自己として生きることは必然的に第三波フェミニズム的に生きることになる。親密な関係性についても同様である。外部の多様な情報にアクセスしながら、自分たちの関係性について考え、改善、更新していくことは、第三波フェミニズム的な生き方だと言える。

第7章 『逃げ恥』とハイ・モダニティ

7.1 『逃げ恥』に観られるコンフルエント・ラブ

ここで、『逃げ恥』における「コンフルエント・ラブ」を考える。『逃げ恥』のポストフェミニズムについて言及した夏野は、主人公の二人の間ではロマンティック・ラブに代わってギデنزのいう「コンフルエント・ラブ」が実践されていると指摘している（菊池 2021）。

物語の中で主人公の二人は、使用者と労働者という契約関係をみせかけの家庭運営に適用する。ここでは、環境の変化に合わせて契約内容に変更が生じるたびに話し合い・交渉によって仕事条件を決定する。

その民主的な決定方法は、雇用関係による夫婦から共同経営者としての夫婦に移行しても実践され続けるのだが、環境と関係の名前が変わっても「純粋な関係性」を維持することによって、現代社会において不可視化されている権利を浮き彫りにする。例えば、以下のような場面にそれが良く表れている。みくりがフルタイムでの副業を始めたとき、二人の会議では家事の分担が決定され、定期的に現状を確認し合い、見直しが図られた。



図 2 家事の分担を提案するみくり

海野つなみ『逃げるは恥だが役に立つ』第六巻 p135

しかし家事の分担がうまくいかず、苛立ったみくりは「じゃあ家事の全部、私がやります」と言ってしまうのだが、「でもそれはボランティアです」「あくまでボランティアなので私が『あー今日はもうご飯作れない』って思ったらご飯作らないし『今日は掃除したくない』と思ったら掃除しません」と付け加える。（最終話シーン 45 : p442）

こうした描写によって、視聴者は共働き世帯における女性の家事労働負担の不均衡に気づくのではないだろうか。夫婦の二人がともに家庭外での仕事をもち、家事を分担している状況において、途中からどちらか一人だけが家事を負担し始める理由はない。本作の二人は契約から始まった関係であるからこそ、この不均衡は無視できないものになる。無償の家事労働が夫婦の一方に偏っているという不均衡を示すことによって、夫婦関係の対等性が崩れていることを示唆している。女性が家庭において家事を負担することに疑問を持ってこなかった人々に対して、家事が労働である状況を用意することによって慣習における男女不平等を可視化している。

一方、菊池はこのような「コンフルエント・ラブ」の物語が、新自由主義的なイデオロギーによってフェミニズムの提起してきた問題を覆い隠していると主張する。文化慣習的及び構造的な差別の問題を個人的な解決方法で、なくなったことにしているということだ。だが、差別は法律が制定されて一朝一夕になくなるものではなく、それが日常で起こっていることであるからこそ、日常の、親密な関係性のレベルにおいて根本的に解決され、制度によって

保障されなければならない。それがすべてでなくとも、少なくともそのような下からの解決を目指す手法はフェミニズムの手段の一つとして承認されるべきである。それが第三波フェミニズムの手法であり、市民生活のレベルにおいてフェミニズムを達成することが再帰的に政治分野を含むフェミニズムを達成することになるのではないだろうか。

ギデنزは、「日常生活における情念の民主化」の実現が民主主義の民主化の必要条件という。まさに『逃げ恥』で描かれる関係性は、日常生活における情念の民主化であった。そしてその情念の民主化の表象がドラマを通して伝えられることで、実際の職場や家庭といった市民生活におけるコミュニケーションとの比較が生じ、自分たちが情念の民主主義の実践とどこに遠い位置にいるかを知ることにもなる。その意味で『逃げ恥』の人気は「日常生活における情念の民主化」からはじまる民主主義の民主化を望む無意識的な願望に裏付けられているかもしれない。

そして、この民主制は労働領域のみでなく親密な関係性においても同様である。雇用関係から共同経営者へと移行する途中に恋人契約を経由し、性関係を持つにいたるのだが、その間、互いの感情を尊重するがゆえに慎重に探り合い、なかなか進行しない。社員旅行という名の疑似新婚旅行の帰りには、気持ちの高ぶった平匡が、みくりにキスをしてしまうのだが、その後平匡はメールで一方的な行為であったと謝罪する。丁寧に気持ちの表明をやり取りする描写は、理想的な「コンフルエント・ラブ」を表現している一方で、「ロマンティック・ラブ」に慣れた視聴者を「ムズキュン」させる。「ムズキュン」とは、じれったく思いつつも気持ちがときめく状態を表す言葉で、「逃げ恥」の広告で多用された。お互いのコミュニケーションを通して合意形成を積み重ねていく描写からは、「コンフルエント・ラブ」の特徴がうかがえるが、同時に「ムズキュン」ということは、現時点では、このコミュニケーションをじれったいと思ってしまうということもあるだろう。ならば「ムズキュン」は、合意形成の重要性を理解しつつも、言葉を使わずに気持ちが通じ合うことを自然視してしまう視聴者の表現でもあるのだろう。

また、恋愛関係においてコンフルエント・ラブが実践できるということになれば、フェミニズムと恋愛の関係性にも変化が生じる。第二波フェミニズムの時期において、ロマンティック・ラブは彼女らの批判対象でもあった。第二波フェミニズムのフェミニストは、女性の経済的な成功、社会的な地位の高まりを目指し、「男性のように」働く女性が、成功した女性であるように考えるひともしなくなかったため、恋愛を謳歌する女性や専業主婦になる女性は、女性に求められるジェンダー規範を脱却できていないと見なされた。しかし、恋愛それ自体は決して人権抑圧的な仕組みであるということはなく、フェミニズムと両立できるのではないだろうか。そのことを『逃げ恥』は結婚と恋愛を一度切り離すことで示した。契約結婚の物語に熱狂した人も、ほとんどは恋愛結婚をするのかもしれない。フェミニストでありながら恋愛ができるという、フェミニストと名乗るには抵抗があった潜在的なフェミニストにとって理想的な生活を示してくれたのが『逃げ恥』だったのではないだろうか。

第8章 結論

8.1 『逃げ恥』はポストフェミニズム的であるか

『逃げ恥』をポストフェミニズム的であるとするのは難しく、むしろ第三波フェミニズムとして評価すべきであるというのが本研究の結論である。ポストフェミニズムは、第二波までのフェミニズムの成功を認め、これ以上のフェミニズムはもはや必要ではなく、新自由主義の原理に則り個人個人の自由な選択と努力によって人生の成功は左右されるという立場だ。確かに、『逃げ恥』が描いた女性たちは、不安に包まれる現代社会生活の中で、彼女たちなりに工夫をしながら理不尽と闘ってきた。しかしその態度は、フェミニズムを終わらせ個人主義や自由主義を称揚しているように捉えられるものだろうか。むしろ、差別に直面する女性たちへの共感と理解を誘うものではなかったか。このドラマ及び漫画を観賞することで、家事の労働的価値や結婚との関係、産休・育休問題など、フェミニズムが不平等性と待遇改善を訴えてきた分野を自身の生活に引き付けて認識することができる。キャラクターの行動に現れるフェミニズム観だけでなく、視聴者にフェミニズムとの接触を新しい形で提供している点も含めて、第三波フェミニズム的な作品であるということができると私は考えている。ポピュラー文化という私的な空間での、女性・ジェンダー問題の理解や共感がインターネット空間を通して広がり、フェミニズムとの親和性を高めていくことそれ自体が、第三波フェミニズムであり、『逃げ恥』が実現したことなのである。

8.2 『逃げ恥』はハイ・モダニティにおける第三波フェミニズム的作品である

一方、ポピュラー文化やそれへの反応において愚痴をこぼすだけでは、根本的な問題解決にはつながらないだろう。第三波フェミニズム的空間で醸成された意見を社会空間全体での問題解決につなげるために、また、そもそもそのように意見を言い合えるようにするために、どのようにアプローチすべきかという課題がある。『逃げ恥』はコンフルエント・ラブというお手本を提示している。ギデンズは、後期近代における国レベルでの民主主義をより高度にするために、「情念の民主主義」を実践することが必要であると説いた。親密な関係性の間からコンフルエント・ラブを実践し、民主主義に必要な素養を市民社会に作ることで、再帰的に政治の民主化を徹底的にしていくことになる。

第三波フェミニズムがポピュラー文化空間を通じて市民の私生活に結び付き、生きられたフェミニズム的知識や問題意識が、男/女・マジョリティ/マイノリティに関係なく多様性を保ったまま「常識」として共有されることが第三波フェミニズムの目指すところであり、ハイ・モダニティ社会の再帰的特徴によって実現可能なアプローチなのである。

また、『逃げ恥』で実践される生活のシステム化も同様に近代の再帰性を示している。私生活から「結婚」「家事労働」「恋人」「愛情」といった要素を個別に取り出し、それぞれの要素間にあるイデオロギー的な関係性をそぎ落とす。そうすることでイデオロギーや慣習の裏に不可視化され抑圧されていた人権と自由を取り出し、一般的な人権と自由の取り扱いに従って生活方法を定めていくことができる。近代的な知識によって、私生活の分野に近代を導入しているのだ。

この作品は視聴者及び読者に対して、日本の市民社会は実はまだ近代化されていないとい

うことを暴露する。突拍子もない発案に思えた契約結婚が、意外にもまともな仕組みである一方、現実の家庭空間においては、コンフルエント・ラブすら実践されていないという気づきが、人々の注目を集め、いまだ手に入られていないコンフルエント・ラブへの欲望が人気の形で現れたのではないだろうか。

このコンフルエント・ラブへの欲望は、フェミニズムの問題を不可視化することにはならない。コンフルエント・ラブは、平等を前提とした関係性であり、その関係性を求めることは、フェミニズムを前に進めることと矛盾しないはずである。

『逃げ恥』というフィクション作品を経由して日本の現実を捉え直したとき、私たちは男女の平等が前提とされる関係性に未だ到達していないということを自覚する。であれば、『逃げ恥』にハマる視聴者はポストフェミニズム的に男女平等の課題は達成済みと考えることから遠い位置にあるはずだ。ポストフェミニズムのように男女平等が成功したとすることは難しいだろう。私たちは、第三波フェミニズム的な手法の拡張や行動の変容を取り入れながら、今後も第二波フェミニズムのラディカル・フェミニズムで既に目指されていた「性支配からの解放」、「女性役割の否定」といった私的領域での女性解放の達成に取り組み続けなければならないだろう。

注

-
- ⁱ 「F2 ライフは“モヤモヤフルネス” 悩み多き日常に隠されたビジネスチャンスをつかめ！」と題されたセミナーでの発言。(Screens 編集部 2017)

参考文献

- アンソニー・ギデنز, 松尾精文・成富正信・西岡八郎・藤井達也・小幡正敏・叶堂隆三・立松隆介・松川昭子・内田健訳, 1993, 『社会学(改訂新版)』而立書房。(Giddens, Anthony, 1993, *Sociology: Second edition*, Cambridge: Polity Press.)
- アンソニー・ギデنز, 松尾精文・松川昭子訳, 1995, 『親密性の変容: 近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』而立書房。(Giddens, Anthony, 1992, *The Transformation of Intimacy: Sexuality, Love and Eroticism in Modern Societies*, Cambridge, Polity Press.)
- アンソニー・ギデنز, 佐和隆光訳, 2001, 『暴走する世界: グローバリゼーションは何をどう変えるのか』ダイヤモンド社。(Giddens, Anthony, 1999, *Runaway world*, London: Profile Books.)
- アンソニー・ギデنز, 秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳, 2021, 『モダニティと自己アイデンティティ: 後期近代における自己と社会』筑摩書房。(Giddens, Anthony, 1991, *Modernity and Self-Identity: Self and society in the Late Modern Age*, Cambridge, Polity Press.)
- 江原由美子, 2021, 『増補 女性解放という思想』, ちくま学芸文庫.

- 菊池夏野, 2019, 『日本のポストフェミニズム: 「女子力」とネオリベラリズム』, 大月書店.
- 菊池夏野, 2021, 『『逃げ恥』に観るポストフェミニズム 結婚／コンフルエント・ラブ／パートナーシップという幻想』, 『現代思想, *特集<恋愛>の現在』, 青土社, p120-129.
- 木村涼子・伊田久美子・熊安貴美江編, 2013, 『よくわかるジェンダー・スタディーズ: 人文社会科学から自然科学まで』, ミネルヴァ書房. (引用部分は江原由美子著)
- シェリー・バジェオン, 芦部美和子訳, 2020, 「成功した女性性の矛盾: 第三波フェミニズム、ポストフェミニズム、そしてさまざまな「新しい」女性性」現代思想 48 (4), 169-183, 青土社. (Budgeon, Shelley, 2011, *The Contradictions of Successful Femininity: Third-Wave Feminism, Postfeminism and 'New' Femininities*, New femininities.)
- 杉浦由美子 「なぜ若い男性層が『逃げ恥』を見ているのか」論座, 2016, 12, 13.
<https://webronza.asahi.com/national/articles/2016121200003.html> (2022, 6, 30 取得)
- 杉本喜代栄編, 2010, 『女性学入門[改訂版]ジェンダーで社会と人生を考える』, ミネルヴァ書房.
- 高橋幸, 2020, 『フェミニズムはもういない、と彼女は言うけれど: ポストフェミニズムと「女らしさ」のゆくえ』 晃洋書房.
- 竹村和子編, 2003, 『‘ポスト’フェミニズム』, 作品社.
- 田中東子, 2019, 「第三波以降のフェミニズム」, 『現代思想』 Vol. 47-6 : 319-328.
- 電通総研, 2021, 「The Man Box: 男らしさに関する意識調査」, 2022. 11. 28 取得.
(<https://institute.dentsu.com/articles/2234/>)
- 内閣府, 2019, 「男女共同参画社会に関する世論調査」, 2022. 11. 23 取得 (<https://survey.gov-online.go.jp/r01/r01-danjo/index.html>)
- 中西真知子, 1998, 「再帰性と近代社会: ギデンズの再帰性概念の徹底化を論じる」『ソシオロジ』 43 (1), 21-36, 207, 社会学研究会.
- 宮本孝二 「書評: アンソニー・ギデンズ松尾精文・松川昭子訳『親密性の変容—近代社会におけるセクシュアリティ、愛情、エロティシズム』」
- Screens 編集部, 2017, 7, 3, 『『逃げ恥』は初めて体験するヒットの仕方だった! ドラマ P が考える消費者アプローチ』, TVer, (<https://www.screens-lab.jp/article/2521> (2022, 6, 30 取得))